

本資料は、クリスチャン新聞 2015 年 8 月 23 日から 8 回にわたって連載された資料である。このシリーズは、さらに「ライトの神学」というタイトルで、今後 1 年間にわたり掲載される予定である。本ホームページでは、8 回に分けて順次公開する。感想、ご意見、ご批判などを大野キリスト教会宛の E-mail によってお寄せいただければ嬉しく思う。

ライトとは誰なのか

皆様は、「ニコラス・トーマス・ライト(通称 N.T.ライト、あるいはトム・ライト、以下ライトと略す)」という名前をお聞きになったことがあるかと思います。ライトはアングリカン(イギリス国教会のこと、以下「国教会」と略す)の元主教で、正統的・福音的信仰に立ちながらも、新鮮な聖書解釈を展開し、従来のキリスト教信仰を一味違う切り口で解き明かし、今世界で話題になっている新約学者です。教会の最先端で牧会者として活躍しつつ、アカデミズムの世界においても古代ユダヤ教や新約聖書の分野で画期的な研究成果を次々と発表しています。しかも、抜群のユーモアのセンス、誰にでも親しみを感じさせるオープンな態度、時代思潮に鋭く切り込む大胆な発想、幅広い教養がにじみ出てくる表現力などの優れたコミュニケーション能力を通して、一般社会にも強力なインパクトを与え続けています。まさに「今が旬の人」、という感があります。

日本でもこの 6 月、『クリスチャンであるとは』という書物があめんどう社から翻訳・出版されました。売れ行きも順調のようです。ライトファンの方々は、2015 年を「ライト元年」にしようと張り切っています。引き続き『驚くべき希望』を始め、ライトの数冊の書物が翻訳、出版される予定と聞いております。

先日、この書物が出版されるにあたり、出版元から推薦の言葉を 220 字で書いてほしい、との依頼を受けました。そこで私は、次のような文章を書きました。

「N.T.ライトは 3 つの顔をもっている。まず 1 世紀の歴史研究家で、歴史・宗教・聖書学の学界に新しい驚くべき成果を発表し続けている。2 つ目は英国国教会の主教で、世界のキリスト教界に「創造・新創造」に基づく新しい福音理解を流布し続けている。3 つ目はポストモダンの時代思潮に鋭敏な著述家で、一般社会にキリスト教信仰の絶対性と真理性を挑発し続けている。今や世界の思想界は、ライトをバイパスして「世界・人生・信仰」を論じることはできない状況になってきている。」

まあ、出版社のご要望に答えての文章ですから、少々割引していただかねばなりません、それでもこの文章は、文字どおりに受け取っていただいでよいか、と思っております。

なぜ、今ライトか

ところで、今なぜライトなのでしょう。理由は明白です。メインラインあるいは福音派を問わず、現在世界で最も注目されている神学者は、イギリスの聖書学者ライトを除いて他にはいないからです。

カトリックの世界では、第二バチカン公会議時代に活躍したハンス・キュンク、カール・ラーナー、ハンス・ウルス・フォン・バルタザールのような偉大な神学者たちは、もはや過去の人となりました。前ローマ教皇ベネディクト 16 世(本名、ヨーゼフ・アロイス・ラッツィンガー、在位期間は 05 年 4 月 19 日より 13 年 2 月 28 日)も、実は極めて興味深い神学者でしたが(保守的ではありましたが)、生前退位後名誉教皇となってからは大きな影響を与えるほどにはなっていません。現在のカトリック教会は、第二バチカン公会議(1962 年～65 年)の路線を継承・実践して

いく中で、長年のカトリックの負の遺産を精算することに主力が注がれ、神学的に注目されるようなことはほとんど聞こえてきません。

ドイツ語圏のプロテスタント・メインラインにおいては、バルトやブルトマン以降、ヴォルフハルト・パネンベルク(2014年没)やユルゲン・モルトマン(現在、90才)が大きな影響を与えてきましたが、彼らは既に過去の人になりつつあります。彼ら以降は、世界的に話題になるような神学者はでていません。最近一部の人々の間では、ボン・ヘッファーを見直す動きがありますが、それは、彼の神学的発言というより、彼の生き方を再考しよう(実は、これこそ本当の神学なのですが)という運動に近いと言ってよいでしょう。

英語圏においては、注目されている聖書学者・神学者がいないわけではありませんが、メインラインの教会の神学界をも含め、特別際立って話題に登っている神学者は出ていないように思います。むしろ、イギリスを中心にして、リチャード・ドーキンスたちのような無神論者がキリスト教界に果敢に論争を挑み続けているのが目立ちます。彼らは、「06年を無神論元年にしよう」とキャンペーンはり、キリスト教信仰にまつわるさまざまな問題について発言しています(これらの討論は、インターネット上の動画でたくさん見ることができます)。しかし、こういうネガティブな運動は、たとえ一時的に盛り上がったとしても、「だから何なの」という根本的な問題が浮上し、線香花火的な話題提供で終わってしまっていると言えましょう。

反対に、若い福音主義者の間では、「ポスト福音派」の神学とあり方を巡って活発な討論が展開され、国教会の中に福音的信仰を復権させる動きが見られます。この問題を扱うことは本記事の守備範囲を超えていますので、これ以上の深入りは避けるべきだと思っております。本項の終わりに国教会福音派の動向を知らせている書物を掲げておきます。興味ある方々は、参考にしていただければと思っております。

より興味深いのは、アメリカの福音派の教会、大学、神学校の動きです。特定の聖書学者、神学者たちも積極的に発信していますが(私たちに身近なところでは、バイオロゴスのグループをはじめ、ジョン・ハワード・ヨルダー、スコット・マックナイト、グレゴリー・ボイドなどがいます)、福音派全体が活気にあふれていることは間違いありません。アメリカの福音主義神学会のメンバーたちの多くも、やっと聖書の無誤性の縛りから解放され(むろん、その火種は、一部においてくすぶり続けていますが)、ポストモダン的な社会に積極的に発信し続けています。

特に、リーダー的な存在のある神学者が、「今やプロテスタントの世界では、リベラル以外の人々は皆福音派です」とまで断言していました。特に、聖書の無誤性(inerrancyとか infallibility)の理解をより聖書的な言葉(例えば、「信頼しうる(trustworthyとか reliability)」)に表現し直し、この教理を否定するのではなく、より高く聖書信仰を標榜しつつ、あらゆる解釈の可能性を大切にしながら、一致協力して聖書学と神学を推し進めていくと表明されました。キリスト教界全体をリードしていくという気概と自信を肌で感じさせる一瞬でした。

なお、この問題に深入りすることも、本記事の範囲を超えています。アメリカの福音派の神学的な動向について関心のある方は、マーク・A・ニール著『信仰と批評学の間ーアメリカの福音派、学問、聖書』(91年)、クリストファ・ハイズ、クリストファ B・アンズベリー著『福音的信仰と歴史批評主義の挑戦』(13年)などをお読みいただければと思います。

では、日本のキリスト教界の状況はどうでしょうか。残念ながら、カトリック、メインライン及び福音派を問わず、キリスト教界から日本社会全体に向かってキリスト教信仰(聖書の福音)を発信していこうという空気はほとんどない、

と言わねばなりません。佐藤優や橋爪大三郎といった売れっ子の著述家たちが、キリスト教に関わりのありそうな本を書いて、20 万部あるいは 30 万部と売れる書物を出版しています。こういう状況を見るなら、日本人がキリスト教に関心をもっていないわけではないことが分かります。彼らの書物が何がしかの影響を与えることはあるにしても、10 年もすれば何の話題にも登らないでしょう。

では、日本の福音派はどのような状況にあるのでしょうか。依然として欧米の教会の動向を後追いするだけで、自らの足で立って活動を展開していく姿は見られません。残念ながら、翻訳文化の枠内に留まり、そこから抜け出る兆しは見えてきません。優秀な学者たちもそれなりに育ってきているのですが、教派や教派神学校の枠にきっちりおさまってしまい、一般社会にインパクトを与えるほどには至っておりません。ただし、30 代から 40 代の若い牧師たちの中には、こういう状況を憂い、インターネットなどを通じ、自分たちの考えていること(ボイス)を積極的に発信していこうという動きも出てきています。新しい世代の台頭に期待し、20 年後 30 年後のキリスト教界を彼らに託す以外に希望はない、というのが実情です。

むろん、神学的な活動が活発でない、あるいは神学的话题が乏しいということは、キリストの教会にとって必ずしもマイナス要因だというわけではありません。それが、キリスト者個人の歩みや教会の宣教のわざにおいて、認知的不協和が生じていないということであれば、神学の無風状態は望ましい状況でさえあると言ってもよいでしょう。その場合は、個人と教会がこの世界で生き活きと使命を果たしていることが大前提になります。しかし、もし反対に、キリスト者と教会がこの世において生き生きと活動しきれていないということであれば(例えば、閉塞感に覆われている、窒息死寸前である、若者たちに魅力の無いものとなっている、ポストモダンの社会に届いていない、高齢化・過疎化現象に対応できていない、エキュメニズムに無関心になっている、社会から孤立あるいは遊離している)、その神学に致命的な欠陥があることに気づかねばなりません。聖書の福音理解に真正面から取り組み直し、現代社会に「妥当性(relevancy)」をもつ教会へと体質改善を図っていかねばなりません。

いったい日本のキリスト教界は、どちらの状態にあると考えたらよいのでしょうか。

以上のような世界の神学的状況を踏まえるとき、現代のポストモダン社会に「聖書的な福音」のメッセージを発信し続けているライトに注目するのは当然でしょう。彼はこの 20 年の間、現代社会の思潮を鋭敏に捉え、エキュメニズム(教会一致)運動を射程に入れつつ、大胆かつ有効に神学的な活動を展開しています。日本では、ライトの書物が日本語に訳されなかった事情もあり、今日までライトの神学が話題にされることはほとんどありませんでした。真っ先に取り上げてもよさそうな日本福音主義神学会においてさえ、一部に「ライトは危ない(この意味は私には全く分かりませんが)」という声があるからでしょうか、本格的な議論がなされていません。ごく一部のライト信奉者たちが、読書会やセミナーを開いて学び続けてきたという、まことに寂しい状態でした。

日本の福音派の教会、神学校、各種伝道団体、牧師たち、それに教会のリーダーたちは、こういうキリスト教界の状況から一日も早く脱出しなければなりません。それぞれのグループが、神がこの世界を創造された目的に目覚め、聖書の伝える「福音のメッセージ」を大胆に日本社会に浸透させていくために、大胆な体質改善が求められています。そういう観点から、「ライトに学ぶ」という記事を連載させていただきます。この記事を通して、教会などで学びのグループが生じ、キリスト信仰の奥義が明らかになり、日本のキリスト教界全体が「神の国」の牽引の役目を全うしていくようにと祈っております。

では、このライトとはどのような人物なのでしょう。ある人の神学を知るには、その人自身の歩みを知らねばなりません。神学を、その人の生活から切り離して考えることはできないからです。神学とは、自分の生活の現場で構築されるものです。その際、その人を突き動かしている「根本的なもの」が何かを、見極めねばなりません。もしそれが理解できるなら、やがてその人の神学の全貌が見えてくるはずですが、ライトの発言は多岐にわたっていますので、全てを細部に至るまで理解することは大変ですが、彼が主張したい真意を理解することはさほど難しいことではありません。

1. 教職者になるまで(75年頃まで)

ライトは、1948年12月1日、イギリスの北部ノーサンバーランド州モーペスに生まれました。彼は、幼い頃から、信仰的には中庸な立場を取る国教会の中で育てられました。回心は4才か5才の頃で、一人椅子に腰掛けていたとき神の愛に圧倒され、イエスが自分のために死んでくださったことを受け入れました。また7才か8才の頃、キリスト教のフルタイムの働き人になるようにとの「神からの召命」を受けました。彼は、11才の時から毎日聖書を読む習慣を身につけ、詩篇を毎日、旧約聖書と新約聖書を毎日少しずつ読んでいたようです。あるとき、どうしてそんなふうに進んでいるのかと聞かれますが、それは若い時からしていることで、特にやめる理由はないからだと答えています。自分は、国教会の伝承を大切にしますが、いつでもその伝承より聖書を大切にしている、と公言してはばかりません。自分たちの伝承も含め、伝承に従うか神の言葉に従うかについては一度も迷ったことはない、私にとっては聖書以上に大切なものは何もないと言い切れるところに、ライト神学の最大の特色があります。

最初ライトは、自分の召命は牧会者になることだと考えていました。そのためには、古典語の学びが大切だと考え、セルベルフ学校、ヨークシャの学校に通い、古典語を専攻します。その後68年から71年にかけて、オックスフォード大学のエクセターカレッジで古典文献学(古典文学、哲学、歴史などを含む)を学びます。そのような学びを続けている過程で、自分は学問的な分野で神のために働くことが使命ではないか、と考えるようになります。その頃、大学のクリスチャンサークルに参加し、そのグループの委員長として活躍します。71年に彼は、特待生でオックスフォード大学を卒業しています(B.A.)。

当時のライトは、(ブリストルのティンダルホールの副学長)ジョン・ウエンハムが講演の中で語った、「神学や聖書学の学問に進むのであれば、聖書の権威に服して歩む者でなければならない」という言葉に深く感動し、学問の道に進む決心をします。学生時代から成績は抜群で、72年には3人の学生とともに、早くも『福音書における神の恵み』という書物を出版します。彼はエクセターカレッジにそのまま残り、73年に神学におけるB.A.の学位を、再び特待生で取得します。その頃の彼は、カルヴィニズムの影響を強く受けています。その後、オックスフォードのウイクリフホールで国教会の教職者になるための学びをし、75年にM.A.の学位を、その後D.D.の学位をオックスフォードから受けます。そして、75年には執事に、76年には司祭に任職されます。

1977年、E.P.サンダースは『パウロとパレスチナユダヤ教』という書物を出版し、パウロに関する新しい見方を提唱しました。スコットランドの新約学者ジェームス・ダンも彼の見方に大筋賛同したため、その後の新約学会におけるパウロ理解に大きな変化が生じました。ライトもまた歴史家として、その路線に立ってパウロ研究を進めます。「パウロを窓口にしてキリスト教信仰の起源を解明していこう」、これがライトの神学研究の基本的なスタンスとなりました。ライトはさまざまな分野に自分の意見を発信し続けていますが、この姿勢はいささかもぶれることなく、今日まで一貫しています。

2. 地道な研究時代(75年～93年頃まで)

ライトは、75年にオックスフォードのメルトンカレッジの研究員およびチャプレンに就任します。その後78年から81年にかけては、ケンブリッジ大学のダウニングカレッジで研究員およびチャプレンを勤めます。81年には、『メシヤと神の民:ローマ人への手紙の手紙に関わるパウロ神学の研究』という論文をオックスフォード大学のメルトンカレッジに提出し、DPhilの学位を取得します。

その後81～86年に、モントリオールのマクギール大学の新約学の准教授になります。86～93年にかけては、ウェスターカレッジにおいて研究員とチャプレン、さらにオックスフォード大学の新約聖書の講義者(レクチャー)になります。研究分野もパウロ研究からイエス研究へと広げ、「史的イエス」に懐疑的な人々との論争にも積極的に関わります。その傍ら、国教会の福音派の学者たちを育てるために建てられた、福音派の研究センター「ラティマーハウス」の評議会の秘書となり、活動の場を広げていきます。

ライトは、若い時から著述の賜物を受けていることを自覚し、いくつかの興味深い書物を出版しています。78年にはオックスフォードの学生グループに語った説教に基づき、『小さな信仰、偉大な神』という書物を著しました。その5章には、「主は聖なる方」というイザヤ書6章からの説教が掲載されています(それは72年の聖三位一体の日曜日にセント・エベ教会において語られたメッセージ)。ライト自身が40年後にそれを読み、大きな感動を覚え、今の自分が語っていることとほとんど変わらないと言っているほどの書物です。80年には、福音派の一致を促進させるために、国教会の福音派協議会より要請され、『国教会福音派のアイデンティティー:聖書、福音書、教会の関係』という書物を出版しています(この書物は、J・I・パッカーとの共著で、新しい解説を加え、08年に同じ書名で再販されます)。さらに83年には、『ジョン・フリスの作品』という書物を著し、宗教改革者ジョン・フリス(1533年没)に関する研究を発表しています。

86年にはティンダル注解シリーズの『コロサイ書とピレモン書の注解』を執筆しました(この注解書は08年に日本語に翻訳されました)。2年後の88年には、ステファン・ニールによる『新約聖書の解釈』という書物の改訂版を出版しています。その書物の最初の版は1861年から1961年までの100年間の新約聖書の学術書を扱っていたのですが、ニールは、ライトの助力を得て改訂版に着手しました。ところが、ニールは84年に没してしまったので、ライトは一人で、61年から86年までの期間の書物を加える作業をすることになったのです。

以上のように、ライトは70年代から80年代にかけ、さまざまな種類の書物を出版しています。しかし、基本的には学術雑誌への論文投稿がほとんどで、一般社会や教会に対して働きかけたものはごくわずかでした。そのため、新約学者の間ではそれなりの評価を受けますが、一般社会で注目されることはありませんでした。

3. 脚光を浴びる時代(93年頃～05年頃まで)

しかし、90年代に入ると、様相はがらりと変わります。ライトは学際的な世界だけでなく、広く一般社会を意識し、キリスト教界に情報を発信するようになります。「史的イエス」などの論争を巡って、テレビやラジオにもしばしば出演しています。その書物や講演、インタビューなどは次第に高い評価を得るようになり、彼の活動はどんどん広がっていきます。そうやっていく背景には、むしろ彼の稀有なコミュニケーション能力がありました。しかし、それだけでなく、彼が国教会の中でより高い地位に登りつめていくことと深く関係していました(むしろ、この両者の関係は、鶏と卵とどちらが先かという問題に帰着しますが)。

ライトは、94年から99年まで、リッチフィールド大聖堂の首席司祭(Dean)に任じられます。その後一時的にオックスフォードのメルトンカレッジに戻ります。そして2000年にはウェストミンスター大寺院の最高位の神学者(Canon Theologian)に抜擢され、03年にはダラム大聖堂の主教(Bishop)に就任します。この教会は国教会の中でも古い教会の一つで格式も高く、国教会第4位の地位にあります。世界遺産にも登録され、映画「ハリー・ポッター」の撮影現場としても有名になりました。

06年8月4日、ライトは5年間の教会関係の法定代表者に指名され、イギリスの国会にもしばしば招待され、国家の問題にも深く関わるようになります。こういう状況の中で、彼の発言は国教会内でもますます大きな影響力をもつようになります。ところがライトは、10年4月27日、学究的な生活と放送などの働きに専念したいという理由で、8月31日をもってダラム教会を辞したいと表明します。国教会のさまざまな問題に巻き込まれるより、学術的な研鑽、執筆と講演活動の道を選んだのです。その結果、スコットランドのセントメアリーカレッジの「新約聖書と初期基督教の研究教授」に就任します。このような決断の背景には、何があったのでしょうか？ おそらく、ライトの神学に対する国教会の評価が微妙に反映しているように思われます。

4. 評価と批判のはざままで

ところで、大変大雑把な言い方ですが、05年頃までは、ライトの聖書解釈と神学は、ほとんどの人に歓迎されてきました。しかし、彼の神学を必ずしも快く思わない人々が出てきました。むろん、そういう人たちは最初からいました。ライトがそれほど目立たなかった時代は、反対もそれほど大きなものではありませんでした。しかし、彼の名声の評判になるにつれ、彼を冷ややかな目で見ると人も増えてきます。そのようなグループは、大きく2つに分けられます。

一つは、お膝元の国教会内の教職者グループです。96年にロンドンで、聖公会の福音派グループのリーダーたちによるカンファランスが開かれました。このカンファランスは、福音的な聖公会の教職者たちが一致して行動するため、福音的な主教たちにより招集されたものです。その会合において、リッチフィールドの首席司祭だったライトと、保守的な福音派の代表者パウロ・ガードナーとがルカ24章の内容について討論しました。そこでガードナーは、「一世紀時代のユダヤ人たちは未だ捕囚時代にあると考えていた」というライトの主張に疑義の念を表明しました。ライトは自らの主張を弁護せざるを得なくなるのですが、この時以降、ライトの考えは無条件で受け入れるべきではないという空気が、教役者仲間に広がっていきます。さらに、当時の国教会は、同性愛者同士の結婚や女性教職者の認否を巡り、大きく揺れていました。ライトは前者には否定的、後者には肯定的な立場を取りますが、そういう立場のライトを批判的に見る同労者はたくさんいました。

時代は少々さかのぼりますが、1976年に、第一回の聖公会の「教会同盟会議(National Evangelical Anglican)」が開かれました。その会合は、従来タブー視されてきた問題に積極的に取り組もうという主旨で開かれ、ジョン・ストットが指導的な役割を果たしました。76年のキーレにおける1回目の会議では「関わること」、翌77年のノッティンガムにおける2回目の会議では「解釈」、88年のカイスターにおける3回目の会議では「統合」の標語が掲げられました。ライトは、77年の2回目の会議で起草された「変わりゆく世界においてキリストに従う」という宣言文に深く関わりました。

ところが、03年のブラックプールにおける第4回の会議では、「聖書、十字架、宣教」が最重要視されるようにな

ります。そのときに指導的な役割を果たすのは、ライトに疑義の念を抱いていたガードナーでした。08年には、ロンドンで5回目の「一日の協議会」が開かれますが、いずれの会合においても、ライトは発言する機会を与えられません。これは、ライトの国教会における実質的な立場を物語っています。彼は、公には10年までダラムの主教ですが、06年ぐらいからアメリカにおける活動に重点を移すようになっていきます。

ライトの終末論についても同じことが言えます。国教会の多くの教役者は、ライトの書物を読み、個人的には彼の解釈に賛成している人もたくさんいました。ところが、教会の牧会という現場に立つと、従来の福音、天国、終末理解などを修正し、新しい路線で進もうとする教役者は多くはないわけです。たしかに、ライトの神学的提唱は、牧会の現場で応用されるどころまでは行きませんでした。長い伝統を背景にした国教会内での話です。慎重になるのは、当然といえば、当然のことでした。医学でも薬学でも工学でも、どのような学問の分野でも同じことは起こります。神学の世界だけを例外視するのは酷いものでしょう。宗教の世界では、古いものを新しく変えていくには、ときにはいく世代も要するものです。百年単位、ときには千年単位で取り組まねばならないことさえあることも、知っておく必要があります。

10年10月には、南アフリカのケープタウンで「第3回ローザンヌ会議」が開かれました。その準備委員会がロンドンで開かれますが、そこにおいてもライトは、何の役目も果たすことはできませんでした。このケープタウン会議では、「包括的な福音」の理解が討議され、社会の問題に深く関わっていく決意が表明される予定でした。ライトは既に「創造から新創造へ」という神学的フレームを確立しており、彼独自の終末論を展開していました。ロンドンで開かれた準備委員会において、社会的責任を十分果たすためには確固たる神学的土台が必要であるという意見が出され、ライトを招いて発題してもらおうとの動きがありました。しかし、その場ではライトの神学に大きな関心を示されることもなく、そのことに関するメールのやり取りも通り一遍のもので終わりました。ライトは、ケープタウン会議に公式に招かれてはいましたが、発言の機会のないことが明らかになったため、ライト自らその招待を断りました。

ライトに対して冷たい態度を取り続けたもう一つのグループは、オックスフォード大学の教授やその仲間たち、メインラインの中で聖書批評学を継承してきた新約学者たちでした。当時の新約学会は、ライトのアプローチは、これまで自分たちが築き上げてきた学問的土台を根幹から揺さぶるものとして、脅威に感じたようです。そこで、一切無視するという立場を取る学者たちも現れました。例えば、オックスフォードのクリストファ・M・テュケットは、01年に『キリスト論と新約聖書：イエスと彼の最初の弟子たち』という書物を著しているのですが、ライトについては一言もふれていません。注や参考文献の中にも登場しません。125人の現代の新約学者たちの名前が索引に出ているにもかかわらず、ライトに関しては一言の言及もありません。このことは、どう考えても不自然の誹りを免れません。

オックスフォード大学では、ライトの著作を読んでいる学生たちは「根本主義者」と見なされ、冷たい目で見られると聞いたことがあります。また、オーストラリアの神学生たちの間では、ライトの書物を読んでもいいが、隠れて読みなさいと教授から忠告されたという逸話まで伝わっています。この種の伝聞は、どこまでが真実なのかははっきりしませんが、ありうる話です。学問の世界では、ライトはリベラル派からは「根本主義者」と批判され、根本主義者からは「ラディカル過ぎる」と批判されています。ライト自身は、聖書の学問的な研究成果と現実の教会が置かれ

ている世界との間に大きな乖離のあることを憂え、その橋渡しをしようと考えていました。しかし、現実には大変厳しい状況にありました。

福音派の中でさえも、ライトを無視したり、批判する人々がいましたが、ポスト福音派の神学を模索している若き学者たちは、概して言えば、ライトを積極的に評価しています。例えば、グラハム・グレイ(リドレイ・ホール・神学大学学長)は、私たちは皆「批判的な現実主義者」にならねばならないと主張し、ライトについては「福音派の学際的な水準の高さを示す代表的な歴史学者」と評価しています。ライトはしばしば、ヨハネが「ことばは人となって」(ヨハネ 1:14)と述べているが、教会は「人をことばに戻してしまった」と述べています。ケンブリッジ大学出身のマジ・ダウン(現在はエール大学准教授)は、このライトの視点に注目し、ライトの学問的業績や神学の方向性を強く支持しています。

ライトの評価については、国教会の中では、現在もなお揺れ続けているように思われます。保守的な福音主義者に厳しい批判を向け続けてきたジェームス・バー(オックスフォード大学の旧約学者、06 年没)の次の言葉は、ライトの立ち位置を見事に表現していると思います。「ライトは確かに福音派の学者ではあるが、むしろ彼は独自の道を歩んでいる。誰も、ライトに向かってこう考えるべきだと言うことはできない。私は彼の言うことすべてに賛成する必要はないと思っているが、彼の発想や神学的展開については大いに敬意を払っている」。

言うまでもなく、ライトの著作の真意を理解し、正しく評価するには、彼が仕えている国教会、特に福音派の動きをよく知らねばなりません。国教会の中では、福音派の教会が時代のニーズに応じた活動を、過去 30 年以上にわたって活発に展開してきた結果、若者たちや教会から離れていった層を呼び戻すことに成功してきました。むしろ、福音派の教会が礼拝形態や教会活動を刷新し、国教会内部にその発言力や影響力を増し始めると、按手札を受けて教職になろうとする人々の数を制限したり、組織の中核の人事に福音派の人々が侵入してくることに極度に警戒心を抱く人々が増えてきていることも事実です。この辺の微妙な動きを知っておくことも、ライトという一人の聖書学者・神学者を理解するためには重要なことです。

むしろ、このようなことは、キリスト教界のムラ社会の問題で、つまらない、笑い話にもならない問題です。しかし、この種の問題は、アメリカでも日本でも、世界中どこでも起こり得ることで、そういうくだらない問題からも逃げずに真摯に取り組みながら、キリスト教界の負の遺産を清算して「神の国」の働きを発展させていくことが求められているわけです。日本の福音派の若き牧師たちが、この辺の事情をも理解し、受け止め、スケールの大きな人物になって、キリスト教界全体を引っ張っていただくことを祈っております。

福音派絡みの国教会の動きを知るのに役立つ書物として、次のような歴史書を紹介しておきます。

ロジャー・スティール著『情熱に燃えている教会：イギリス国教会福音主義者たちの物語』(98 年)

R・T・フランス、A・E・マクグラス編『福音派のイギリス国教会』(93 年)。

メルビン・ティンカー編『国教会福音派の危機：聖書に基づいた教会に対する急進的な日程』(95 年)

ディブ・トムリンソン著『ポスト福音派』(95 年)

グラハム・クレイ(他 5 名)著『ポスト福音派論争』(97 年)

パウロ・ガーナー、クリス・ライト、クリス・グリーン編『炎を燃え立たせる：聖書、十字架、宣教』(03 年)

グレゴリー・マクドナルドの『福音派の普遍主義—神の愛がすべての人を救うという聖書的希望』(06 年)

リチャード・タンブル著『国教会と福音派?』(07 年)

ステファン・カート著『すべての人のためのトム・ライト』(11 年)

5. ライトの著作について

ライトは、さまざまな種類の書物を著していますが、代表的で重要なのは、「キリスト教の起源と神の疑問シリーズ」という、大部の学術的な著作です。学術的と言われると、素人には分からない難解な書物とイメージされると思います。しかし、実際にはそうではありません。確かに、聖書に関する基礎知識が全くないと理解し難いところがあります。しかし、新約時代の歴史的背景や、新約各書の成り立ちなどについて少々の知識があれば、少しも難しいものではありません。

ライトは、啓蒙主義以前、啓蒙主義、啓蒙主義後の近代主義及びポストモダン的な聖書の読み方の違いを丁寧に説明しながら執筆しています。聖書批評学などについても、資料批評から様式史批評、編集史批評を経て物語批評に至るまでをよく整理し、ポストモダン的な感覚を大切にしながら、読み物としても十分耐えられるよう、構成に多くの工夫をこらしています。書物の分厚さに圧倒され、引いてしまわないで、脚注などは気にせず、本文を普通の読み物として読んでみると、聖書の講解説教を読んでいるかのような錯覚に陥ります。細かなことは気にせず、楽しくお読みになることをお勧めします。

ライトはある箇所で、「自分の本を一番初めに読み、最初に感想を寄せ続けてくれるのは91才になる父でした。聖書の学問には全く無縁な父ですが、700頁の本を3日間で読み終え、大変面白かったと感想を述べてくれました。たとえどのような学術書であっても、父が分かるように書こうと務めています」と述べています。もし、ライトのこのような執筆姿勢を知るなら、私たちがまた、ライトの学術書にチャレンジする勇気が湧いてくるのではないのでしょうか。

このシリーズの1巻目は『新約聖書と神の民』(535頁)で、92年に出版されました。そこでは、新約聖書時代のユダヤ人の問題が取り扱われています。2巻目は『イエスと神の勝利』(741頁)という書名で、96年の出版でした。3巻目は『神の子の復活』(816頁)で、03年の出版でした。この2巻目と3巻目は、イエスの十字架と復活に関する事柄が扱われています。そして4巻目は、『パウロと神の誠実さ』という書名で、3巻目から10年後の13年に出版されました。その書物は4部に分かれており、Ⅰ部(パウロと彼の世界)とⅡ部(使徒のマインドセット)が一冊になっていて605頁、Ⅲ部(パウロの神学)とⅣ部(歴史におけるパウロ)がもう一冊で1053頁、合計1658頁という膨大な著作です。

このシリーズは、これまで20年以上の歳月をかけて執筆されてきたもので、全部で3,750頁の大著になります。しかし、これで完成というわけではなく、今後さらに2冊が追加される予定です。内容については分かりませんが、とにかく6巻もののシリーズで、総頁数は最終的には6,000頁を超えることになるでしょう。

神学は、神と歴史と被造世界のすべてを扱う学問です。従って、書くことが次から次へと沸き上がってきて、留まるところを知らないというライトの心境も理解できます。ヨハネは、「もしそれらをいちいち書きしるすなら、世界も、書かれた書物を入れることができまい」(ヨハネ21:25)と述べていますが、ライトの本を読んでいると、ヨハネが言いたかったことがよく分かるような気がします。

しかし、ライトの偉大さは、このような大部の学術的な著作にある、というわけではありません。広く一般社会に対しても、キリスト教界や一人ひとりのキリスト者に対しても、神からのメッセージを何とか届けたいと、ポピュラーな書物をたくさん出版し続けていることにあります。

ライトが想定している読者層は、3つに分けられます。一つは、従来の伝統的なキリスト教信仰に凝り固まっている教役者や神学生です。彼らには、現代のキリスト教界にとって大切なテーマを新しい切り口で、かなり学際的な匂いを強めて書いています。第二は、教会の信徒一人ひとりに慰めや励まし、霊的な祝福を与えようと、牧会者の立場から書かれています。ここでは学術的な香りは薄まり、新鮮な表現やプレゼンテーションが目立ちます。そして三番目は、キリスト教に懐疑的な一般社会の知識層です。彼は、初めから福音的聖書信仰の立場を鮮明にし、時にいわゆる学問的な論理を超越して大胆に発言をしています。極端な懐疑主義者であるバーバラ・シーリング、A・N・ウイルソン、ジャック・スポーグなどの「イエス・セミナー」の論客に対しても、圧倒的な存在感を見せて論破できるのは、ライトならではの感があります。

先の学術的なシリーズの書物を別にすると、次に紹介しなければならないのは、01年から「すべての人シリーズ」として出版されている、新約聖書の簡明な註解書シリーズです。それは08年まで続き、パウロ以外のすべての手紙（ヘブル書は例外）と黙示録を除いて完成しています。信徒を対象にして平易に書かれたものですが、内容的にレベルが低いわけではなく、学術的に深みのある内容を分かりやすく解説しています（日本語の翻訳が出版される予定）。このシリーズから、新約聖書本文のライト訳のみを抜き出して出版されたのが『王国の新約聖書』（11年）です。ライトらしい翻訳が随所にみられ、デボーションなどで活用すると大きな励ましを受けるでしょう。

これらのシリーズの他に、ライトは今日までに、50冊以上のポピュラーな書物を著しています。そのほとんどは、一般信徒向けの分かりやすいものですが、そういう書物であっても凡に墮することなく、学術的にもしっかり裏付けされた著作として出版されています。これらの書物の多くは、いろいろな教会や大学、神学校などにおいて、講演や討論、説教やインタビューなどから生まれたものです。例えば、07年に出版された『驚くべき希望』という書物は、もともと01年にウェストミンスター大寺院で語られた講演を、少なくとも別の9箇所の教会や大学、神学校において繰り返し、人々のニーズに応え、文章を熟成させていって書物にまでまとめあげたものです。

そのようなわけで、誰が読んでも分かるような内容に構成されています。その話題のほとんどは、ライトが10代の頃に抱いた疑問を出発点にしており、しかも90歳を超えた自分の父が一読して分かるようにと熟考した文章です。時々、韻を踏んだ美しい文章の中には、戸惑うような単語が使われることもあります。大意を掴めばよいのですから気にする必要はありません。英語の美しい文章の読解にチャレンジするのも、面白いのではないのでしょうか。といっても、英語が苦手という人も多いでしょうから、ライトを高く評価する人々が、今後順次ライトの書物を翻訳出版する計画をたてています。その時を楽しみにして、お待ちいただきたいと思います。

ここでは、私の手元にある書物だけですが、テーマごとに紹介しておきます。

まず、ポストモダンあるいは弁証学的な書物として、『悪と神の義』（06年）、『クリスチャンであるとは（今回日本語に訳された書物）』（06年）、『創造、力と真理』（13年）などがあります。

次に、聖書論に関しては、『新約聖書と神の民』（92年）、『聖書と神の権威（翻訳される予定）』（05年）、『驚くべき聖書』（14年）、『なぜ聖書を読むのか？』（15年）です。

イエス伝としては、『イエスとは誰だったのか？』（92年）、『オリジナルなイエス』（96年）、『主の道』（99年）、『イエスのチャレンジ』（00年）、『シンプルなイエス』（11年）です。

キリストの復活については、『冠と火』（92年）、『神の子の復活』（03年）、『イエスの復活：ジョン・ドミニコ・クロッサンとN.T.ライトの対話』（06年）です。

神の国については、『イエスと神の勝利』(96年)、『神はいかにして王となられたか』(11年)、『シンプルな福音(翻訳される予定)』(15年)などがあります。

パウロの神学については、『契約のクライマックス』(93年)、『聖パウロは本当のところ何と言ったのか(翻訳される予定)』(97年)、『パウロ:フレッシュな視点で』(09年)、『義認』(09年)、『パウロと神の誠実さ』(13年)などです。

教会論に関しては、『新しくされた教会に対する新しい仕事』(92年)、『素人のための聖餐式』(99年)、『すべての聖徒のために』(03年)、『聖公会、福音派のアイデンティティー』(08年)などがあります。

終末については、『千年という神話』(99年)、『新しい天と新しい地ーキリスト者の希望の聖書的な描写』(99年)、『驚くべき希望』(07年)、『黙示録』(12年)などです。

なお、説教集としては、『イエスに従う』(94年)、『主と彼の祈り』(96年)、『すべての人に神の価値がある』(97年)、『聖書、十字架、神の民』(05年)、『十字架とコーリーの街』(07年)、『すべての人のための新約聖書の知恵』(13年)などがあります。また、キリスト者の歩みについては、『栄光を反映する』(98年)、『生まれ変わった者達の美徳』(10年)、『詩篇の中に神を発見する』(14年)などです。

20年ほど前ほとんど無名に近かったライトは、今日の英語圏において最も影響力のある聖書学者として注目されています。彼は、類まれな著作能力を神から与えられ、教会のリーダーでありながらもアカデミズムにも身を置き、さらに一般の人々にもコミュニケーションする能力にあふれているという特異な人物です。ユーモアのセンス、誰にでも親しみを感じさせるオープンな姿勢、時代思潮に鋭く切り込む大胆な発想、質疑応答の場面で見せる独特なカリスマ性、どれひとつとっても、彼のような人物はしばらく出てこないのではないだろうかと思わされます。音楽を愛し、スポーツを楽しみ、散歩好きで、誰からも愛される講演者、説教家、作家であるライトは、4人の子もたちとその孫たちに囲まれ、奥様をしばしば講演旅行に同行させるという幸せな家庭人でもあります。